

東三河スタートアップ・サテライト支援拠点検討プロジェクトチーム 第2回会議 議事録

日 時：2020年10月22日（木）午後2時30分から午後4時まで

場 所：東三河総合庁舎 大会議室

1 開会

2 挨拶（リーダー：神野東三河広域経済連合会会長）

- チーム員の皆様方には、大変お忙しい中、第2回目のプロジェクトチーム会議にお集まりいただき、感謝申し上げます。
- 前回は、新型コロナウイルス感染症の影響でウェブ会議にて開催し、それぞれの活動の紹介を中心に行った。こうした1つの空間の中で集まるのは今回が初めてとなる。
- 愛知県が積極的に整備を進めているスタートアップの中核的な支援拠点「ステーションA i」は、名古屋でプロジェクトが進んでいる。その施設の建設等に先駆けて、知事のリーダーシップのもとで世界各国の教育機関等と積極的な提携を行っており、先日も、商工会議所連合会の会頭会議で、大村知事からホットな話を伺った。特にシンガポール国立大学とは、4つの分野における大変興味深いプロジェクトが進んでいる。清華大学やヨーロッパの大学等ともコロナ禍にあっても、空間を超えて、色々なプロジェクトが大変積極的に進んでいる印象である。
- 東三河のプロジェクトは、愛知県内では名古屋とは別にいち早くスタートをしていただき大変ありがたいと思っている。それと同時に、サテライト支援拠点として、他の地域の先駆けになれるよう責任があると思っている。
- 第1回会議では皆様方からそれぞれの取組の内容等についてお話をいただいた。伊作さんがいらっしゃる武蔵精密では、その後も大変積極的に展開している。夢のあるプロジェクトを従来の武蔵精密が持っている製造業ではない部分においても、生産技術や経営資源を活用して新しい分野に展開をされており、大変期待が持てる。
- 今日お集まりの皆さんも、それぞれの組織で色々な試みをされていると思うので、この試みをきちっと共有するとともに、愛知県のスタートアップのプロジェクトとコラボしていくことで、それぞれの取組が、シンガポール国立大学や清華大学、テキサス大学なども情報共有が図られ、つながりができてくると思う。これだけでも意味があると思っており、先方から、愛知県では今までのテーマとは違うけれど、こんなことをやっているんだということで、深掘りしたいとか、色々なことに繋がっていくと思う。そういったエコシステム、新しいものにどんどん展開が広がっていく、オープンな状態が形成されていくことが、愛知県にとって大きな力になると思う。
- プロジェクトチームの皆様には、そういったことを考えながら積極的に取り組んでいただければ、自分のところでも生きてくるし、自らの組織においても、エコシステムを作っていただければと思う。

- 7月には内閣府から、日本全体のスタートアップ・エコシステム グローバル拠点都市として、愛知・名古屋及び浜松地域が認定されている。東三河のお隣は浜松ということで、浜松との連携の入口のような役割を担う必要があると思っている。浜松市がどういう展開をしているかということも認識しておく必要があると感じている。
- 本日は、有意義な時間にしたいと思うので、よろしく願い申し上げる。

3 議題

(1) ワーキンググループにおける検討状況について

- 事務局から説明（資料 1-1～1-3、資料 2-1～2-4）

東三河広域経済連合会 神野氏（リーダー）

- 示された概念図はどちらかというに関わる組織体のプロットであるが、実際にスタートアップのプロジェクトをやっていくにあたっては、プロジェクトごとに人だったり、研究室だったり、どういう風に関わって、どういうプロジェクトをやっていくかが1番大事になる。そこにどういう風に関わっていくか、どういう新しさがあるのかということだと思う。そういう意味で、次の議題で発表いただく、それぞれの機関がどういうことをやっているのかということ、スタートアップの組織とどのように連動させるかだと思う。

(2) スタートアップに関連する取組の状況等について（資料3）

中部ガス不動産株式会社（サーラグループ）赤間氏

- 第1回会議の際に、サーラグループのスタートアップ支援の取組ということで、直接的な投資や、連結するグループ内でスタートアップを育成することはやっていなくて、VCの投資ファンドに投資するというスタイルでやっているという説明をさせていただいた。これについては、前回の会議から今回の間に、新たにファンドへの投資を進めている。
- 本日は、中部ガス不動産が取り組んでいる豊橋駅前二丁目再開発、これは弊社単独ではなく、再開発組合でのプロジェクトだが、この取組について説明させていただく。工事は順調に進んでおり、低層棟の5階がスタートアップ支援拠点の場となる。2階、3階には豊橋市の図書館が入り、1階と5階でサーラグループとしての事業をしていく。
- タイトルはスタートアップ支援拠点と書いてあるが、東三河の「食」「農」の魅力を高める挑戦やスタートアップを支援、地域の人々のリカレント教育の場と機会も提供するというので、必ずしもスタートアップ企業あるいはスタートアップを志す方だけの場所という位置付けではないと思っている。
- ハード面では、大きなテーマは学びとイノベーションであり、賃貸オフィスだけは企業のオフィスとして貸し出すが、全体で600坪のフロアの賃貸オフィス部分を

除く部分が、主に学びやスタートアップ支援となる。

- 真ん中の光庭は、光が取り入れられるようになっており、この真ん中を中心に陸上のトラックのような廊下があって、その周りに色々な空間を設置する形となっている。
- シェアオフィス、コワーキング、会議室、セミナールームがあり、100人規模のセミナーや会議が開催できる。その他、地元の教育機関のサテライトキャンパスがある。こうしたそれぞれの目的に応じた空間と共に、真ん中上にあるサロンは、それぞれの利用目的に応じて自由に使えるスペースであり、くつろいでいただいたり、交流をしていただく。リラックスしながらアイデアを出していただける、遊び心ある空間がサロンということになる。
- コーディネーターとして、このスペースの利用者や会員のニーズ、中だけでなく外部と組み合わせていくような人を配置したいと考えている。
- 技科大の山本先生にも言われたが、大事なのは、ハード面よりまず何をやるかである。皆様にもお知恵をいただきながら、スタートアップの育成プログラムや教育に関するコンテンツ等、開業は約1年後なので、ここから1年間でしっかりやっていく。
- 1階でも事業をやる予定があり、ここでは、食とか農に関する、東三河の食や生産物の魅力を地域住民の方はもちろん、日本中、世界中に発信していく場としたい。スタートアップ育成の場と、食・農の場は、別の事業とは捉えておらず、1階、5階をしっかり繋げながらやっていきたい。

武蔵精密工業株式会社 伊作氏

- 東三河 Innovator's Gate というプログラムで、我々の主催としては2回目となるが、武蔵精密としては3回目で、東三河からイノベーションを起こしていこうということである。
- うちの社員を中心に第1回目はやったが、イノベーションってなんで起きるんだと議論したところ、色々な人が交わっていかなきゃいけないということであり、単純にイベントというよりも、教育をしながらプロセスを学んでもらえるようなプログラムにしたいということで昨年からは始めた。昨年は、サーラさんやイノチオさん、OSGさん、浜松のFCCさん、豊橋技術科学大学の学生さんにも来てもらった。これだけバラエティに富んでいると、新しい考え方が混じり合っていくのかなと感じた。ただ、振り返ると課題があって、今年は選抜のプログラムから熱量を上げて開催していきたい。
- それと、コロナによって、やり方を少し変える必要がある。コロナだからリモートでやるというよりも、むしろ効率を上げて答えを出していくためのいい手段の一つであると思う。うちは製造業なので、もちろん現場にいたい、その中でも色々なところと繋げていくということであると、即時に世界中と繋がれる。今回は、特にリモートでWebベースというところを少し意識しながら、プログラムを展開しようと思っている。今回は、サーラさんを始め、JAひまわりさんなど、新しい仲間が増えてきた

ところで、うちも頑張ろうということで2チームできて、二十何人かから選抜したので、こういったことを盛り上げていくと色々繋がっていくと思う。

- 今年は、ちょうど始まったところで、来年2月に発表を控えているので、来ていただいてご意見をいただきたい。Webでも参加できるので、またご案内させていただければと思う。
- CLUEという施設は、もっと色々なところに繋がっていく必要があるということで、ネットワークを広げ、もっと色々な人が交わる場所と機会をイベントで終わらせないように、エコシステムとして仕組み化して繋げていきたい。
- 農業というテーマの中でいうと、今進めている農業のマッチングがある。働きたい主婦であったり、シニアの方と忙しい農家さんを繋げるプログラムで、アグリトリオという会社を、今年4月にスピンアウトして法人化している。このプログラムのノウハウがかなり盛況で、800人くらいの会員ができたり、愛媛県で展開したりしている。
- また、農ケアという農福連携のプログラムで、福祉施設と農家を繋げていくというプログラムがある。こういうプログラムを、もっと日本、世界への展開を視野に入れてやれたらいいなと思っている。
- 一緒に考えて行けたらと思うのは、スマート農業とかの話はいっぱい出てくるが、どちらかというとソフト領域で、それからハードを作って、一番困っているのは実証する場がないということ。アイデアで止まってしまうスタートアップが特に農業系は多いと思う。
- Waphyto (ワフィット) は化粧品で、東三河を健康というキーワードでブランディングしようということで新しく事業を始めた。一緒に協力してくれるのが、豊橋市出身の森田敦子さんという植物療養学をベースにした取組を十何年やられている方。東三河は奇跡の土地で、中央構造線上を豊川が流れている。土地の酸性が強すぎて、うちの会社も東京で創業してこっちにきて農業をやろうとした時には、うまくいかなかった。その土地で育った植物は、自分の体を守るために機能性成分が富んでいることが分かった。これに目を付けなんとかブランディングできないかということで、今、化粧品ということで始めているが、最終的には健康、介護施設の食事など、大きな健康事業に繋がれると思うが、うちだけではできないので、こうしたネットワークの中で色々な人達と繋がりながら、是非こういったことを東三河で進めていきたい。
- 10月から社内でバイオの研究するラボを作って、豊橋技術科学大学の浴先生達と東三河独自の土壌などを研究している。最終的には医療に繋がって行くと思うし、健康事業に繋がって行くと考えている。こういった東三河をブランディングする取組をみんなでやれたらいいと思っている。

イノチオホールディングス株式会社 小田氏

- 「休める農業」「儲かる農業」を後押しということで、ITベンチャー企業と当社で、タグを組んで作り上げた「agri-board (アグリボード)」というものである。農業

の作物を作るシステム化は進んでいるが、労務管理のシステム化、見える化はなかなか当社もできていないところ。そこに IT ベンチャーの企業が取り組みたいということで、当社のノウハウを使いながらシステムを作り上げたというのが経緯である。

- まず、パートさんそれぞれの得意分野やできる収穫の量は人によって違うので、それを数値化、データ化して、このパートさんは何が得意で、この作業なら1時間にどれくらいできるというのをデータ化する。それに応じて、明日この業務をやるときにどれだけの労働力が必要なのかとパートさんの都合を組み合わせることで数値化したものと、翌日の作業データを比べて、過不足なくやっていくことで効率的になる。多すぎると人件費が高くなるし、少ないと作物の収穫が遅くなるので、そこをうまくマッチングさせるシステムがこの「agri-board」である。
- 実証実験をやりながら一緒に作り上げてきているので、大規模農業をこれから手掛けていこうとする企業やベンチャーと一緒に紹介しながら、実証できていますよと農業の裾野を広げることに貢献できたかと思っている。
- カオナビさんという IT 系の企業とも繋がりがあり、当社が導入していた経緯もあり、カオナビさんの使っているシステムを使いながら、農業の紹介や販促を出口戦略のところで使えないかなと、連携して進めて行けたかと思っている。
- 農業単体での魅力付けはなかなか難しいが、農作物と健康や農作物の魅力とファッションのように繋げ合わせて上手くマッチングできると面白い展開になると思う。

株式会社サイエンス・クリエイト 堀内氏

- スタートアップガレージは、起業の相談や交流の場として使ってもらっており、コワーキングスペースは、たくさんの人に使ってもらっている。メイカーズ・ラボは、3Dプリンターやレーザ加工機、デジタルミシンなど、最新のデジタル機器が置いてあり、自由に使ってもらっている。ここではロボティクス広場という、子供たちを対象にした裾野を広げるような取組も行っており、年間1万人以上の方に利用してもらっている。今年はコロナの影響で利用制限したこともあって、例年に比べて半分以下と利用者の数は減っている。相談件数でいうと、これまで300件以上の相談があり、新規事業の立ち上げも14件と前年を上回る状況である。こうしたコロナの中にあっても、スタートアップに対する関心と需要は高まっていると感じる。
- 前回からの新たな取組として、宇宙ビジネス相談デスク「宙（ソラ）サポ」を立ち上げた。今、衛星データは活用しやすくなっており、これを活用した新たなビジネスの関心が高まっている。5～9月末まで103件の相談があり、市内に会社を立ち上げたり、事業所を開設したり、具体的な事業の提案が既に4件出てきており、今、支援を行っている。
- ビジネスプランコンテストは今回が第20回目である。東三河全域をターゲットにしている、募集件数は、去年は120件と多かったが、大体年間で50～60件で、その中から優秀作を選んで表彰して、その後、創業の相談に乗ったり、色々な支援をして

いる。来年度、幅を広げて新たな展開をしていこうということで、広域連合さんと話を進めているところである。

豊橋技術科学大学 山本氏

- 平成 29 年度に文部科学省の次世代アントレプレナー育成事業に名古屋大学を基幹大学として、岐阜大、名工大、三重大、豊橋技科大で採択された。本学においても、このプログラムを活用して、平成 30 年度からビジネススクールを開講した。
- スタートアップに必要な講義をここですということ、概要が資料に書かれている。例えば、アントレプレナーシップ基礎の講義に関しては、IBM で長年の実務実績のある高嶋教授に講義をしてもらっている。スタートアップに必要な人材育成という観点からビジネススクールをご活用していただけたらと思う。
- コストの高い人工光植物工場においては、付加価値の高い作物を育てないとペイしない。そうすると、先程、武蔵精密工業さんがおっしゃっていたように、植物成分を機能化して変える、例えば、糖尿病の方が食べるレタスなど、そういう植物成分が柔軟に変えられるシステムというようなことを頭に置きながら、人工光植物のスマートアグリテック、IT 農業によって、地域に貢献する方向で、今地道に進めている。ご承知のように、高山弘太郎教授が IT 農業の一番先駆的なことをやっているの、そういうことで地域の農業に貢献したい。
- 私自身の感覚としては、豊橋市というところは、街中にハウスが分散している。つまり、大規模農業化されていて、あるところにドカンと広いハウスがあるのではなく、普通の家があるところに小さなハウスが分散して存在している。こういうのは、今後のウィズ・アフターコロナにおける生活様式として、あるいは食料の調達として、地産地消よりもう少し小さなマイクロ地産地消という概念として生かしていけるのではないかと思う。大規模農業という集約化の反対方向、いわゆる分散と多様性という方向性で考えていくのが今後の IT 農業の在り方ではないかと考え、大学でも農業と食ということについて、地道に研究を進めている。

東三河広域連合 野尻氏

- 本日の資料としたのは、豊橋市の取組のガクラボという、大学生・高校生の交流スペースである。直接、スタートアップ支援というわけではないが、スタートアップに繋がるような発想が生まれやすい、そういう意識が根付くような風土づくりを市町村としてはやっていきたいという考えの基に、まずは学生からということで、こういうスペースを造った。愛知大学の前の南部窓口センターの 1 階を使って、9 月 26 日にスタートした。
- また、先程、サイエンス・クリエイトの堀内副社長からご紹介があったが、ビジネスプランコンテストについては、来年度から行政の支援主体を豊橋市から広域連合に移して、より広く東三河全体で参画できるような形をとっていきたい。豊橋市だけで

なく、各市町村の創業支援の担当課と連携を強くしたり、また、例えば、中山間部の課題解決とか、沿岸部の課外解決といった新しいお題もやれないかなと調整している。

- もう一点紹介したいのが、豊橋市が、地域課題解決のイベントとして、スタートアップを公募して、市が抱える課題に対して、その解決を市と共同して実証実験、開発をやっていくことを始めている。お題は3つ出して、1つ目は介護関係。2つ目は、外国人市民への情報発信がうまくできるようなツールの開発。3つ目は、道の駅にシェアキッチンがあるが、そこで新しいビジネスが生まれないかという提案の募集をかけた。全国23社から応募があったが、残念ながら、この地域のスタートアップの採択はなかったが、そういうことをやって、地域の風土づくり、意識づくりをやっていくべきだと思う。
- 行政的な役割分担を考えると、市町村は、スタートアップの入口を広げる、スタートアップの前の段階や初期段階を、サイエンス・クリエイトと組みながら、風土づくりというか、スタートアップの入口を広げるような取組を担っていく形が良いのではないかと考えている。

武蔵精密工業株式会社 伊作氏

- 今の豊橋市の3つのテーマの取組について、スタートアップと何かをやるときに、スタートアップに任せてしまうと、リソースが足りないのではないかなと思う。例えば、そのアイデアを地域で展開するメンバーを半分募りつつ、そこと融合してやるというやり方をすると、すごく有効だったのかなと思う。すごくいい取組だと思うが、スタートアップの人達は人手が足りないので、どれを優先していこうかとなる。この地域から一緒にやる人いませんかと探せると良い。

株式会社サイエンス・クリエイト 堀内氏

- サイエンス・クリエイトも市と一緒にやっているが、目的としては、色々な行政課題、地域課題を解決するための提案を民間から出してもらって、民間のプロジェクトを作ろうというものである。それは、東三河地域の産業振興が大きな目標となっている。今回は初めてのことであったので全国展開をしたが、地域の人達を取り込んでいけるような組み立てにしていきたい。

東三河広域経済連合会 神野氏（リーダー）

- 一歩を踏み出すためには、環境整備をきちっとしてあげないとできない。その時に規制だとか色々な制約が出てくる。特に社会課題の場合は、課題が色々な行政の組織をまたいでいることがあるので、縦割りの問題をクリアすることが必要。また、できれば、東三河くらいの単位でやった方が、マーケットが大きくなるから良い。

武蔵精密工業株式会社 伊作氏

- 社会課題の解決はできるが、事業としてもうからず、サステイナブルにならないことが大きな課題になっている。例えば、最初の立ち上がりの時とか。うちのアグリトリオも、うちのバックアップがあったから最初の立ち上げができた。事業にするには、いかに投資を集めるかが課題だと思う。特にハード系をやられているスタートアップ。

東三河広域経済連合会 神野氏（リーダー）

- 個々の取組や機会はたくさんあり、それに準じてプログラムも色々あるが、見えにくいのは、個々のプロジェクトがどういう風に進んでいるのかの理解と、それを充実させるちょっとした仕掛けが足りないと思う。例えば、技科大で長く取り組まれているIT 農業関連の受講者は500人を超えるくらいいるが、それぞれが先端農業をやられていて、それぞれで情報共有して、お互いに切磋琢磨して、農業技術や流通のことは情報交換しているが、全体として共同で見ているところはほとんどない。それを無理矢理束ねる必要はないが、その人達が乗っかってきたくなるようなプラットフォームを作るともっと活性化すると思うし、ビジネスに活かせるところがあると思う。個々のプロジェクトのオープン化が足りないので、そこがもったいないと思う。

豊橋技術科学大学 山本氏

- それぞれが素晴らしい先端のことをやっているが、バラバラにやっているので、シナジーが生かせていない。それはどうしてかと考えると、それぞれが豊かだからではないかと思う。

東三河広域経済連合会 神野氏（リーダー）

- それもあると思うが、例えば農業だと、市役所やJAといった関わる組織も多く、土地利用の制限など、非常に課題が色々ある。もっとうまくやれば、耕作放棄地や休耕田はいっぱいあるので、もっと可能性があると思う。行政の果たすべき役割は大きいですが、その辺が縦割りで非常に難しい。できればそういうところを含めて、やっていけるといいと思う。

株式会社サイエンス・クリエイト 堀内氏

- 今、それぞれが活動し、商工会議所に集まって情報共有しているが、まだ十分にはできていない。サテライト支援拠点という話では、そこには全体を総括する、上の協議会的なものがあつたら良いのではないかと思う。

愛知県 松井副知事（サブリーダー）

- 今日皆さんから大変良いお話を聞いた。先日、伊作さん（武蔵精密工業）のところにお邪魔して、まさにこういうところからイノベーションが生まれるのだなと思っ

た。豊川の中央構造線の話は、牛川の渡しにジオラマがあって見てきた。東三河にはいい土壌と水があるということで、これを生かし、農業と食というテーマでやっていけることを確信している。また、スタートアップに関しては、ステーションA iを中心に、県下の色々な拠点が連携をとっていくことが重要ではないかと考えている。

- 来年度の重点事業の一丁目一番地は、スタートアップによるイノベーション改革だということが知事の思いである。しっかりと来年度の事業を組み立てていきたい。